

共同納骨碑の造立と先祖祭祀

—新潟県糸魚川市押上「百靈廟」の事例—

孝本貢

- 一はじめに
- 二糸魚川地域における共同納骨碑の事例
- 三押上部落の社会構造的特質
- 四宗教的世界
- 五百靈廟造立
- 六若干の考察

統合を目指むひとつの手立てとしたなどの要因が考えられる。それの受容を可能にしたのは家・同族の社会的境界が弱かった、ないし、弱体化していくがためといえる。しかし、家はその存続のために様々な社会関係を取り結ぶよう、その自立性は決して堅固なものではない。無縁仏化から守る、また、先祖祭祀の永続のためにひとつの地域的応答であったといえる。

論文要旨

先祖祭祀の実態は多様なバリエーションがある。それは政治権力による宗教政策、宗教集団の姿勢、地域社会の社会構造、さらには家の存立構造など種々の要因が複雑に絡まっており、單一の因果関係では説明できないものである。本稿では北陸地方を中心にしている共同納骨碑を事例に取り上げ、その建立の社会構造的原因を解明しようとした。従来墓地・墓は仏壇とともに家・同族の境界・統合を表象するひとつの物的装置とみられ、その祭祀形態が分析されてきた。ところが北陸地方などで管見しえたいくつかの地域では家墓地がなかったか(一事例)、従来の家墓地を整理統合して共同納骨碑が、古くは近世末期から昭和六〇年代にわたって建立されている。それは遺骨尊重の観念の浸透、社会移動にともない、無縁仏への恐れ、また、村の